

Title	ミクロヒストリーと日常生活の歴史
Author(s)	ブルーア, ジョン
Citation	パブリック・ヒストリー. 2005, 2, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/66422">https://doi.org/10.18910/66422</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## ミクロヒストリーと日常生活の歴史

ジョン・ブルーア

水田大紀（訳）

「歴史をまったく別の原理で探究するとき、時間は身近なものになる。つまり、法廷や議会、戦場がどんどんと後背地に押しやられ、かわりに寺院や工場、社会生活がますます前面に押し出されるとき、歴史学は、人々がいかにも『課税され沈黙を余儀なくされた』のかという問いに答えるだけでは満足しないだろう。歴史学は、これとは異なる無限に大きく重要な疑問に答えようとするだろう。その疑問とは、当時において何が、どうして人たるのかという問いである。このとき、我々の政府や『我々の生活が営まれる家』ではなく、そこで営まれる生活自体が探究の対象となるだろう」（Carlyle, [1889] 83）。

はじめに

ここ40年のあいだ、「日常生活」が歴史学研究にふさわしい対象として、歴史記述の場面で注目されるようになってきた。この「日常生活」とはすなわち、民衆の経験や行動、慣習のことである。この動向は英語圏では「新しい社会史」と呼ばれ、ジェンダーや人種、性行動に関する、新しい社会運動を背景として記述された歴史学を意味した。同様に、ドイツでは「日常史」(alltagsgeschichte)、イタリアでは「小さな歴史学」(microstoria)、フランスではポスト・アナール学派の文化史と呼ばれ、これらはすべて、身近なもの、個人的なもの、感性的なもの、小規模で平凡なもの、日常的なものに関心を寄せている。少なくとも、これらの研究のいくつかはかなり著名である。たとえばそれは、植民地期および独立革命期のアメリカを研究したジョン・ディーモス (John Demos) とローラ・サッチャー・ウーリッチ (Laura Thatcher Ulrich)、フランス近世史のロバート・ダートン (Robert Darnton)、ナタリー・ゼーモン・デーヴィス (Natalie Zemon Davis) やル＝ロワ・ラデュリ (Le Roy Ladurie) を含む多くの研究者、イタリア史のジーン・ブラッカー (Gene Brucker) やジュディス・ブラウン (Judith Brown)、カルロ・ギンズブルグ (Carlo Ginsburg)、そしてジョヴァンニ・レヴィ (Giovanni Levi)、ドイツ史のデ

イヴィッド・サビーン (David Sabean) やハンス・メディック (Hans Medick)、アルフ・ルトウケ (Alf Ludtke)、スペイン史のリチャード・ケーガン (Richard Kagan) らの研究である<sup>(1)</sup>。社会史、マイクロヒストリー、日常生活史をひとまとめに論じる際、違った (それぞれの国固有の) 歴史学の伝統のなかで、明確に区別され展開してきた研究を融合するには十分な注意が必要であろう。たとえば、アメリカの学者による研究は文化人類学、とりわけクリフォード・ギアーツ (Clifford Geertz) の研究に大きく影響を受けているし、フランスやイタリアのマイクロヒストリーはアナール学派の「長期持続」的歴史学に反旗を翻すものであった。彼らにとってこのアナール学派の歴史学とは、従属的な諸階級をフランソワ・フュレ (Francois Furet) が「数と無名性」(Ginzburg, [1980] xx) と呼んだものに追いやってしまうものであった。他方、ドイツの「日常史」は、エドワード・トムスン (Edward Thompson) の「経験」概念を、労働者階級の政治的闘争だけでなく彼らの日常生活を明らかにするために活用しはじめている。さらにマイクロヒストリーという分野のなかでさえ、デイヴィッド・ベル (David Bell) とブラッド・グレゴリー (Brad Gregory) は、彼らがそれぞれに、非日常と日常の歴史、挿話的な歴史と構造的な歴史と呼ぶものの相違を指摘した (Gregory, [1999] 102, Bell, [2002] 262)。いいかえれば、未知の世界の扉を開く特別な出来事の研究と、日々の行動を丹念に再構築する研究とを彼らは区別しているのである。しかし、これらの異なる種類の歴史学はすべて、類似点や共通の関心事、さらに探究に値する1つの共有された文化をもっている。それらはまた、1980年代の共時的な歴史を共有している。もっとも、そのなかでも著名な学者の多くは1968年世代に属している、ともいえるのだが。そこで今回は、第2次世界大戦以降に出現した歴史学以外の社会科学の文脈 (たとえば批評論や社会学、カルチュラル・スタディーズ) に新しい歴史学を位置づけるなかで、こうした歴史学研究の歴史、力関係、方法論、長所や弱点を明らかにしたい。とくに私は、この史学史的潮流が社会科学と政治学における2つの主要な論争から派生した点を強調したい。その論争の1つは、近代資本主義下での日常生活の本質に関わり、もう1つは自由意思と決定論の関係をめぐって盛んに論じられてきた問題、つまり人間の活動の効力に関するものである。批評論と歴史学研究を結びつけるのは、人間の活動とその歴史的意味を日常行動のなかで位置づけ、社会的現実を日常の平凡さのなかにちりばめられたものとしてみる人文学への共感である。この立場は、抽象的で計量的自由主義的な社会科学と、ポスト構造主義的で、懐疑的な反人文主義の双方を批判するものである。この主張を論証するために、私は歴史学および文化理論の幅広い研究を活用するが、主要な事例と焦点は、北アメリカやイギリスよりもむしろ、イタリアとフランスの研究におくこととする。

1

では、問題を少しずつ整理することからはじめよう。我々は2つの異なる文脈のなかに、日

---

(1) 彼らの研究の詳細については文末の参考文献を参照。

常生活に対する歴史家の関心を位置づけねばならない。まず第1に、私が日常生活に関する凡庸な説明と呼ぶものがある。「日常生活」について文献を探してみると、初等教育で教えられたような社会史の類の著作——古代アッシリアや近代アルバニア、古代ローマ、どこだっているのだが、それらはすべて「どこそこの日常生活」というタイトルではじまる——が数多くあることにうんざりする。そのような著作が強調するのは好古趣味や民族誌学的なものであり、とくに物質文化や社会習慣、家族生活に力点がおかれている。まれに時代の変化に関心を示すことがあるものの、それらはある種の懐古趣味、つまりピーター・ラスレット (Peter Laslett) の著作のタイトルにあるような『われら失いし世界』(Laslett, [1965]) の回復やその描写への傾倒に満ち満ちている。ヨーロッパにおいては、少なくとも17世紀まで遡れる地方の好古的、考古学的そして家系学的研究の長い系譜があり、それらはヘルダー (Herder) \*<sup>1</sup> が好んだロマン主義的民族誌学において隆盛を極めた。1960年代まで、そのような研究は大学ではほとんど行われなかったが、多くの慈善団体では人気を博し、出版界でも大きなシェアを占めていたのである。

続いて第2の文脈とは、20世紀初頭からはじまった日常生活に関する文芸批評論であり、それはマルクス主義または左翼による批判の伝統と結びついている。それはジェルジ・ルカーチ (George Lukacs) にはじまり、超現実主義者やヴァルター・ベンヤミン (Walter Benjamin)、バフチン (Bakhtin)、アンリ・ルフェーブ (Henri Lefebvre)、状況主義インターナショナル (Situationist International) \*<sup>2</sup> を通じてミシェル・ド・セルトー (Michel de Certeau) まで続く、よく知られた系譜をもつ学者のあいだで流行した。彼らの基本的な関心は、商品化された資本主義社会における現代の日常生活の本質、その束縛感、欠乏から自由への転換、退屈さから創造性への転換、そして疎外と断片化から完成された人間像 (a human wholeness) への転換に向けられていた。決定的に、それは失われたものとしての歴史的变化についての議論であり、人間性回復の問題を論じている。その議論の大前提の1つが (ルフェーブの著作に最も色濃く現れているように) 現代の専門化された知識が社会的統制と修練の道具に成り下がり、その結果として、自己実現と人間理解の素材を我々がみつけられるのは日常生活の領域においてのみである、ということである。このとき、チャールズ・テーラー (Charles Taylor) が青年ヘーゲル派 (初期マルクスも含む) の「表現主義\*<sup>3</sup> 的 (expressivist)」な伝統と呼ぶものが念頭におかれている。これらは、抑圧的なスターリン主義を連想させる頑迷かつ無意味な経済主義

---

\*1 ドイツの哲学者。啓蒙主義を批判し、おもに言語を中心とする民族文化の歴史的性格を重視、ロマン主義の精神的基礎を作ったとされる。

\*2 状況主義インター、シチュアシオニストとも。欧米のカウンターカルチャーの有力な潮流の1つ。

\*3 表現派、表明説、表出主義とも訳されるが、もともとは20世紀初頭のドイツを中心とする芸術運動をさす。自然主義や印象主義を否定し、心の内側からの感情表出を重視した。主観的意志の「表現」をめざしたこの運動は絵画に始まり、1905年ドレーズデンでキルヒナーたちの「ブリュッケ (橋)」が、1911年ミュンヘンでカンディンスキーらの「ブラウエ・ライター (青騎士)」などのグループが結成された。音楽のシェーンベルクや文学、演劇、映画、建築にも波及した。

(economism) <sup>\*4</sup> を排除した、新しいマルクス主義や社会主義を形作った第2次大戦後の思潮の一部と考えるべきであろう。いうまでもなく、それはまた自由主義に対する断固たる攻撃であり、冷戦を理由に西欧資本主義を擁護する議論への反論でもあった。<sup>(2)</sup>

日常生活について学界で行われてきた歴史叙述は、こうした2つの伝統に依拠している。しかしこの点について詳しく考察する前に、歴史叙述の本質、とくに近年の社会史や文化史の本質について一言述べておこう。有名なことではあるが、ル＝ロワ・ラデュリは次のように述べている。「歴史家たちは落下傘部隊 (parachutists) とトリュフハンター (truffle hunters) の2つのカテゴリーに分類される」。私はそれを少しばかり変えて表現し、景観論者ジェイ・アップルトン (Jay Appleton) が最初に行った区分を用いて、歴史学の2つの型、つまり「眺望型 (prospect) の歴史学」と「閉じこもり (refuge) 型の歴史学」<sup>\*5</sup> について論述していきたい (Appleton, [1996])。眺望型の歴史学は、広大で大規模な景観を調査し分析しうる単一で超越的な視点——鳥瞰図的または高尚な頂き——から記述される。そのような歴史学の好例はチャールズ・ティリー (Charles Tilly) の、適格に名づけられた『巨大な構造、大きな過程、大規模な比較』であろう (Tilly, [1984])。観客や書き手はその景観のなかではなく、その外側にいる。その高さ、大きさ、距離のために、眺望型が行う観察や記録は特定なものではなく一般的なものであり、その輪郭や表層はみえるものの、細部については明瞭さを欠いた画一的な型または総体的な傾向が記述される。この種の歴史学の長所は形式的で抽象的な点であり、アダム・スミスが熟考し評価した市場の機能に通じるものがある。しかしその利点は権力的であり、世界中の手に負えないものが何らかの方法で創造主の要求を満たす様式や形式に合うように再生される、ということの意味する。この種の歴史学において、知識と洞察は抽象的な科学から生まれるのであり、主観と客観は明らかに区別され、別個のものとなるのである。

それとは対照的に、閉じこもり型の歴史学は対象に肉薄し小規模である。その力点は、空間よりはむしろ特定の場所、特殊事情と細部の念入りな描写、一定の囲い込みにおかれている。閉じこもりのなかでは、互いに関係し合う多くの視点が存在する。そこでは相互依存の形態や、表層や距離感よりも内面性や親密さが強調される。閉じこもり型の歴史学の利点は、歴史をコントロールする感覚ではなく、(人物と細部の両方に対する) 帰属意識、関係性から生じており、そこでは読み手も参加者となる。この種の歴史学では、知識と洞察は共感と理解から、愛情のこもった復元の過程から生じるものであり、閉じこもり型の歴史学とは居心地のいいもの

---

(2) この動向に関する有益で全般的なサーヴェイについては、Gardiner, [2000]、Highmore, [2002]、Bennett & Watson, [2002]などを参照。

\*4 マルクス主義の文脈ではおもに、革命を犠牲にして物質的な生活の向上を求めること。この克服がレーニンの課題となっていた。

\*5 環境心理学などで使用される概念「Prospect - Refuge Theory」の援用。定訳としては Prospect: 眺望、Refuge: 隠れ場所となっているが、歴史学ではまだまだ馴染みのない概念であるので、本論文では後者を文意に合わせて「閉じこもり」と訳すことにする。

(heimlich) である（この表現もアダム・スミスの『国富論』ではなく『道徳感情論』からの引用である）。

私が眺望型と閉じこもり型の歴史学を区別するのは、それらがすべての歴史叙述のパターンを包含するような普遍的な原型であるからではなく、2つのまったく異なる歴史叙述の型のあいだに隠喩的な対比があらわれていると主張したいからである。それは（もっと一般的な）語りの対比というよりもむしろ地誌的、審美的、心理的な観点からの対比である。

よくいわれることだが、ミクロヒストリーと日常や身近なものへの関心は、社会科学や批評論の分野における「大きな物語」に対する至極一般的な否定と批判の1つとして説明され、理解されるべきである。これは真実である。しかし重要な点は、ここで取り上げられるものがそのような語りの問題ではなく、ジョヴァンニ・レヴィが強調するように、規模と視点の問題であることを理解しておくことである（Levi, [1981]）。

もし我々がある特定の種類の「大きな物語」に着目するなら、この傾向はさらにはっきりとしたものとなる。その「大きな物語」とは冷戦擁護論者によって生み出された自由主義的近代化論である。それは新しい日常生活の歴史が興隆しはじめたのとまさに同じ時期に、レーガンやサッチャーが用いた新保守主義的な自由主義として復活した。多くの識者が指摘するように——ブラッド・グレゴリーやデイヴィッド・ベルを念頭におく。彼らはともにミクロヒストリーや日常生活の歴史の分野で優れた業績を残している——、この新しい歴史学は、政治的な幻滅と知的な幻滅の両方を反映していた（Gregory, [1990] 100, Bell, [2002] 266-7）。政治的幻滅は2つの面を有した。つまり急進的な政治変革の展望が後退したことと、自由主義的資本主義の制度や価値観が目覚ましい耐久力を身につけていったことである。この政治に対する幻滅は知的幻滅により補強されるのと同時に進行した。その知的幻滅とは社会主義者、自由主義者だろうがアナール学派だろうが、社会変革の手段としての、そして社会経験の論拠としての、計量的な社会科学的歴史学に対する幻滅であった。さらに、フーコー（Foucault）やアルチュセール（Althusser）にはじまる構造主義の酷評がそれに追い討ちをかけた。グレゴリーがいうように、「政治制度、法人の力、技術革新、大衆向けの宣伝の変幻自在な相互作用」は、じつは急進的な変革をめざすバラバラの諸勢力を閉じ込める鉄の檻であった（Gregory, [1999] 100）。構造主義的マルクス主義と後期資本主義はともに、まるで無気力と受身の合いの子だった。一例として、フィリップ・アリエス（Philippe Aries）は1970年代に進歩に対する批判について以下のように論評している。「それ（進歩に対する批判）は、左翼あるいは不十分な定義で括られた左翼主義に対して、さらにはそれを捨て去るよう、乱暴だが精力的に働きかける復古的な右翼から投げかけられたのだ」と。そしてアリエスはこの批判を「前産業社会とそこに暮らす人々の心性」の研究の飛躍的成長へとつなげたのである（Ginzburg, [1993] 20）。

この反発は自由主義的資本主義や近代化論ではなく、それを裏打ちした特定の型の日常生活、すなわち豊かな商品文化に向けられたものであった。他のすべての論者、たとえばルフェーブルや状況主義者、セルトーが反対したのは、こうした物質的な日常生活観であった。我々は、第2次大戦後以降、とくに近代化論の擁護者たちが欠乏の終焉を予言した1960年代まで、日

常生活に対する独自の（高度に政治化された）説明およびそれと西欧資本主義との関係も含めて、近代化論がいかに強力であったのかを忘れがちである。

近代化論は近代の基本的な指標として機能した。この指標となったのが、たとえば持続的な経済成長や高水準の政治参加、世俗化、高い地理的、社会的流動性、そして歴史学のテーマとしては新しい部類となる近代的個人であった（Attir, Holzner & Suda, [1981] 42-6）。近代化論は自己完結したものである。近代化という考え自体への問いかけはなく、ただ特定の事例が近代化の構成要素となるかどうかを問うのみであり、超歴史的で量的なカテゴリーが用いられる。それはすべての社会を計測する、単一で直線的に進歩する時間のモデルを用いる。しばしば指摘されてきたように、近代化論は時間、空間の両面で西欧化された考え方であり、そのなかではすべての社会が、明確に西欧と結びつけられた近代性の達成度で評価される。この理論により「この場所はいつの時代か」と規定することが可能になる。ピエール・ヴィラルール（Pierre Vilar）が述べたように、近代化論は「『共生という単一の地球的空間』によって作り出される『世界時間』という単一の尺度をどうにか確定したのであり、そのなかでおこる様々な活動や事件は単一の計量化された年代記にしたがう」のである（Harootunian, [2000] 49）。これは文字通り眺望型の歴史学であり、西欧の勝利を頂点とする時間的、空間的連続性のうえに、すべての経済や社会、文化を配置した見方であった。そのようなモデルでは、「西欧型」発展を基準に非西欧世界が判断され、第3世界は近代化を培養する一種の実験場として扱われた。カルロ・ギンズブルグは、この種の「自民族中心主義」に対して、イタリアのマイクロヒストリーが意識的に反対したことを強調している（Ginzburg, [1993] 20）。

もちろん、この種の理論は目新しいものではない。それはチュルゴー（Turgot）やアダム・スミスおよびスコットランド啓蒙主義の憶測好きな歴史家たちにより最初に提示された社会的発展段階論の系列に属するものであった。1950年代、60年代における経済発展論は同様のモデルを使ったし、経済成長のモデルを精巧に作り上げるために理論家たちを回顧するものだった。したがって、W. W. ロストウ（W.W. Rostow）の『経済成長の諸段階——1つの非共産主義宣言』（この本は1960年から72年までの間に、英語圏だけで25万部という驚異の冊数を売り上げた）は、「より賢明な公共政策の形成のために」イギリスの歴史を活用し、ロシアの共産主義よりも西欧のモデルの方が第3世界の進むべき正しい道であることを明らかにしようとする明確な意図をもっていた（Cannadine, [1984] 147-8, 152-4）。

この冷戦構造による経済発展の定式化は、富の増大と財産所有権を民主主義の概念に結びつけたその理論を通じてさらに精巧なものになった。その代表例が、1960年代初頭の古典的研究、シーモア・マーティン・リップセット（Seymour Martin Lipset）の『政治のなかの人間——ポリティカル・マン』である。リップセットはそのなかで、「人々が理性的に政治に参加し、無責任なデマゴグの放言に圧倒されないために必要な自制心を発現しうる」ことを保証できるのは大衆の富裕化のみであると主張している（Lipset, [1963] 50）。

リップセットの民主主義の基準には教育や福利だけでなく、消費の水準——乗用車の普及率、1人当たりの電話機やラジオ、新聞の数——も含まれている。「民主主義の達成度が低い国に

において143人に1人しか車を所有していないのと比べて、達成度が高いヨーロッパ諸国では17人に1人が車を所有している。ラテン・アメリカでも、独裁政権が強い国において274人に1人であるのに対し、独裁の弱い国家では99人に1人が車を保有している」(Lipset, [1963] 54)。

つまりここで我々は、ある種の物資(より正確にいえばある種の物資の普及)が特定の政治体制と明確に結びついていることを確認したのである。いいかえれば、冷戦のあいだ、アメリカの商品——もちろん、その古典的な例は、キューブリック(Kubrick)<sup>\*6</sup>が『博士の異常な愛情』のなかで頻繁に使用し、ダニエル・ミラー(Daniel Miller)によって脱構築されたコカ・コーラであるが(Miller, [1997])——は、アメリカ型の(自由民主主義的な)生活様式を表象するものとなっていたのである。あまり問題なく認識される(使用というよりも)所有としての消費は、政治の重要な指標となる。一連の(商品を通じて示される)経済的、社会的慣例は、政治的なヴィジョンや商品のイデオロギーと融合しているのである。近代的日常生活に付属するもの、つまり清涼飲料や冷蔵庫、電話機といったものは、ときにグローバルな闘争の一部となる。これはたとえば、1959年、モスクワで開催されたアメリカ博覧会で、当時のニクソン副大統領がロシアの「兵器」に対しアメリカの主婦が使用する洗濯機を対置して有名となった、台所論争を想起すれば明らかである(<http://teachingamericanhistory.org/library/index.asp?document=176>)。

冷戦期における自由主義者の奮闘のおかげで、ある種の(アメリカ的)生活様式の投影と消費財の繋がりは自然なものとなった。しかしこの繋がりは、冷戦のイデオロギー闘争により生じた歴史的にみても特殊な結果として理解すべきである。アメリカの場合その闘争は、学界だけでなく、意図的に特定のアメリカ型生活様式を区別して輸出したアメリカ文化情報局や国務省により支えられた。これは(アメリカ型の)日常生活という商品文化中心の資本主義政治であり、それ以降、近代性や商品文化、日常生活についての論争を形作ったものであった(Cohen, [2001])。

## 2

そのような見解に対して政治的な反対意見が表明されたことは容易に想像がつく。たとえば勝利した資本主義の擁護論であるという批判、あるいはルフェーブルが「管理された消費という官僚社会」と呼んだものによって生まれた不平等や軋轢、誤った認識、疎外を考慮に入れない、という批判がそれにあたる(Lefebvre, [1984] Ch. 2)。しかしたとえ、その多くが左翼の歴史家たちから提起されたものだとしても、強力な方法論的批判も存在したのである。

---

\*6 アメリカの映画監督。『非情の罭』、『現金に体を張れ』、『突撃』などで注目を集める。『スパルタカス』で大作も撮れる監督として評価され、『博士の異常な愛情』または私は如何にして心配するのを止めて水爆を愛するようになったか』、『2001年宇宙の旅』、『時計じかけのオレンジ』の「SF3部作」を完成。世界的な映像作家としての地位を確立した。他の作品としては『シャイニング』、『フルメタル・ジャケット』などが著名である。



とくにジョヴァンニ・レヴィは、「一定で予知可能な諸段階を通じて常に進化し、そのなかでは団結と軋轢に合わせて社会的動因が自動調整されるという考え方」に対して異を唱えている (Levi, [1991] 94)。レヴィや他の人々がこの種の考え方に反対する理由は、すべてを覆うような、本稿で私が「眺望型の語り」と呼ぶものが排他的で単線的である、という点にある。排他的であるというのは、眺望型の語りがあらゆる種類の個性を消し去る、つまりその考え方が抽象的で対象の実像のみえない、非個性化されたものだという点においてである。それと同時に、眺望型の語りは、レヴィによる「人間社会の全般的な構造のなかで自由意思の程度と本質への問いかけ」を拒否することで、人間の活動に向き合うことにも、注意を払うことにも失敗しているために排他的なのである (Levi, [1991] 95)。また、単線的であるというのは、眺望型の語りが増進の定式化されたモデルに合わない見解を排除しているからであり、そのモデルのなかでおこる矛盾や軋轢を理解できないから単線的といわれるのである。レヴィが主張するのは代替的な視点である。それは、「ありふれた現実と直面するなかで、すべての社会活動は個人の絶えざる交渉、操作、選択、決断の結果であり、それにより個人の解釈や自由の余地が広がる」という視点である (Levi, [1991] 94)。

これは何も大規模な歴史的段階、たとえば近代化や工業化、商品化、都市化などの存在を否定するものではなく、それらを一番うまく理解し描き出すにはどうしたらいいのかという問いかけであり、日常生活の視点からそれらを見てみようとするものである。アルフ・ルトウケは、ドイツでこのようなアプローチから考察を行っている最も精力的な研究者の1人であるが、その彼が提起するように、我々が必要としているのは「商品生産の拡大や国家と官僚制度が大衆によってどのように『経験』されたか」を分析することである (Ludtke, [1995] 8)。これと同様の視点を、ヴォルフガング・カスチュバ (Wolfgang Kaschuba) が提示している。「そのようなアプローチは、国家と階級の形成、宗教と教会、工業化と資本主義、国民と革命に関する『大きな問題』の放棄を必ずしも意味するものではない」 (Ludtke, [1995] 170)。したがって、問題になるのは視点である。ジョヴァンニ・レヴィが書いているように、「ミクロヒストリー研究すべてに共通する原則は、微細にわたる観察こそが以前には注目されていなかった要因を明らかにでき……以前には十分に記述され理解されてきたと考えられる現象に、観察の尺度を変えることで完全に新しい意味を付与できるという信念である。そのとき、より広範な一般化を行うために、これらの結論を利用することは可能である。ただし、最初の観察は相対的に狭隘な範囲内で、実例というよりもむしろ実験として行われるのではあるが」 (Levi, [1991] 97-8)。この種のアプローチの目的の1つはダイナミックな相互連関を確立することである。ロジェ・シャルチエ (Roger Chartier) が提起するように、「信念と価値観、表象のシステムと社会に所属することのあいだの関係を、決定論に還元することなく理解することは、この小さな尺度において、いや多分この尺度においてのみ可能である」 (Chartier, [1981] 32)。つまり、社会史と文化史は日常生活の微細化過程において融合するのである。

ときとして歴史家たちは、考察の尺度を変えることでより完全な歴史像を提示できると主張する。たとえば、ある種のミクロヒストリーの歴史家たちは、自身が「大きな物語」に不満を

もっているが、全体史という考え方に対していまだに憧れを抱くことを認めるかもしれない。これはとくに、イタリアとフランスのマイクロヒストリー史家の場合に当てはまる。なぜなら彼らは反発するものの、ジャック・ルヴェル (Jacques Revel) が「下から構築された全体の歴史」と評した、「全体史 (histoire totale)」というアナール学派の伝統の内に留まることを願うからである (Revel, [1995] 497)。微細な相互作用を研究したフレデリック・バース (Frederik Barth) の人類学に基づいてジョヴァンニ・レヴィが行った、高度に精密なネットワーク分析が目的としたのは、新しい種類の総合性に到達することであった (Rosental, [1996])。しかし尺度の規模に関わらず、総合性や全体性の探求は歴史叙述のなかで最も排他的である。それは林立する歴史より1つの真実の歴史を想定している。これは大いに問題があると思われる。というのも、叙述の理論家たちが主張するように、「大きな物語」と「小さな物語」の間には「フォーマルな」違いがないからである。すなわち、あらゆる話に完全に無垢なものはなく、すべての叙述にプロットが編み込まれているのである。叙述は必然的に選択、包摂と排斥を伴う。総合性や完全性の探求は、小さな尺度を用いる歴史学が「人間行動をよりリアルに描写する」という後で改めて述べる別の問題と結びつく。

必ずしも全体史という考え方を強調する訳ではないが、ミシェル・ド・セルトーとカルロ・ギンズブルグは、尺度とアプローチの変化によって、ありきたりの分析では解明できない現象をいかに再発見し説明できるか、という点を強調している。これは、メノッキオ\*<sup>7</sup>の宇宙論やラウドンのウルスラ会修道女の信仰のように、不合理で迷信的、「異常」なものとして退けられた実践や信念に当てはまる。また、セルトーが「歴史で特権を与えられていない」と表現する近代日常生活の束の間で儂い習慣にも当てはまる (De Certeau, [1986] 189)。イタリアの歴史家たちはこうした考え方を重視してきた。たとえば、エドアルド・グレンディ (Edoardo Grendi) の「典型的な例外」という考え方によれば、近代的で「科学的」な探求において、エキゾチックでもの珍しく二義的にみえる出来事や習慣は、適格な文脈のなかに位置づけられコード化され、適格に探求されると、それ独自の論理と秩序が明らかになるのである (Ginzburg & Poni, [1991] 7)。セルトーは彼の歴史学研究と現代の日常生活に関する仕事の両方に、この考え方をさらに進めた形で採り入れてきた。彼が論じてきたのは、一般的な社会科学的、政治的秩序を解釈するモデルに容易に当てはまる活動や出来事から外れた「例外の細部」、「意義深い逸脱」を、意図的に探り出すための歴史学である (De Certeau, [1988] 35-6)。同時に現代フランスに関する研究において、セルトーは「他者の戦術」を、弱者がなじみのない権力者の戦略を日常生活の実践で自己のために活用する手段とみなしている (De Certeau, [1988] xix)。ルフェーブルと同じくセルトーは、現代において支配と管理を司るヘゲモニーの在り方に抵抗しその力を逸らそうとする (1960年代の状況主義者たちが「ずらし」の戦術と呼んだ) 個人の

---

\*7 本名はドメニコ・スカンディッラ。16世紀イタリアのフリウリ地方に住んでいた粉挽屋であり、2度の宗教裁判を経て焚刑に処せられた。カルロ・ギンズブルグの『チーズとうじ虫——16世紀の一粉挽屋の世界像』の分析対象人物。

能力を強調する。同時に、彼はイタリアとドイツのマイクロヒストリー史家たちとともに、過去における同種の現象を歴史的に探求するよう主張している。

ギンズブルグの方法は、セルトーの手法と似てはいるがいく分違いがある。手がかり (clues) に関する有名な論文において、彼は推測法の系譜を明らかにしている。モレッリーとシャーロック・ホームズのやり方のように、その推測法は微かな足跡や明らかな食い違い (夜中にほえなかった犬) を、隠された真実を示すものとして重視する (Ginzburg, [1989] 96-125)。とくに重要なのは史料にみつかる間隙や矛盾、誤解である (フロイトの思想からの影響は明白であり、彼もそれを認めている)。

ギンズブルグが採用したアプローチは、日常生活を研究する学生が小さな出来事や個別の顛末に対して示す全般的関心の一部として、あるいはヴァルター・ベンヤミンや (ギンズブルグが間接的な「影響」を認めている) ジークフリート・クラカウアー (Siegfried Kracauer) の著作にもみうけられるが、ゲオルグ・ジンメル (Georg Simmel) の優れた著作に遡ることが可能な関心事の一部とみなすことができる (Ginzburg, [1993] 27)。彼らは、ベンヤミンが「世俗的な啓示」と呼んだものを実現するために、儂いものや断片、逸話 (語りや台無しにする叙述の形態)、「取るに足らない細部」、「うわすべりな発現」に注目した (Harootunian, [2000] 71, 86)。

歴史研究の尺度や視点を変更する目的の1つが、方法論、認識論である。重要なのはこうした関心が、歴史としていったい誰が、そして何が大切なのかという問いかけによって形作られることである。これまでみてきたように、日常生活の歴史研究の大半は、多くの文化批評と同様に、民主主義、人民主義あるいは社会主義の課題を抱えている。その課題とは、日常生活の慣習を実演する人々に対して、発言権と認識能力、さらには世界を変革する力と役割を与えようとするものであった。これは、日常生活を通じた変革の可能性を追求したルフェーブルのような人物にも、そして学界に (テーマと人物の両方で) 新たな主題を提起しようと熱望する歴史家や社会学者にも、両方にあてはまるのである。明らかにこれは 1980 年代におこった独創的な研究の先駆けであった。したがって 60 年代、70 年代の社会史家たちは、「貧困な靴下編み工やラッドライト職工、『時代遅れの』手織り職人、『ユートピア的な』熟練工、そして期待を裏切られたジョアンナ・サウスコット\*<sup>8</sup>の信者でさえ、後代のとてつもない偏見から救い出そう」というエドワード・トムスの決意にしたがうことを自分たちの義務と考えたのである (Thompson, [1963] 12-13)。もちろん、トムスはおもに学界の外側で活動しながら、イギリスの労働史と社会主義歴史学の長期にわたる伝統に依拠していた。しかしそれに続く数十年のあいだに、新しい社会運動はあつという間に子供や女性、ゲイ、レズビアン、有色人種を取り込んで歴史学の主題を拡大させていった。イタリアの「小さな歴史学」は、「他の方法では排除されてしまう人々を対象化した歴史学」の到来を告げるものとして描かれていった。ナタリー・

---

\* 8 イギリスの宗教家、預言者。自分は黙示録第 12 章に記された女であると宣言し、64 歳のときに第 2 の救世主を産むと告げたが果たさず、1814 年末に死亡。信者は 10 万人を数えたという。

デーヴィスは、「いわゆる声なき存在という社会的創造性」を掘りおこすと語り (Davis, [1975] 122)、ロジェ・シャルチエは「文盲の啓蒙、女性の経験、愚者の知恵、子供の沈黙」について語った (Chartier, [1997] 46)。そして社会学者ドロシー・スミス (Dorothy Smith) は、彼女の日常生活に関する熱烈にフェミニスト的な分析において伝統的な社会学を批判した。というのも、「経験を分析し社会を記述する方法そのものが、人々の実際の会話や彼らが語るべきことを包み込む、客観化された解釈を生み出すからである。その言説は社会学上の担い手として主体の存在を消し去り、人々を研究の主体から探求の客体に変えてしまう。」からである (Smith, [1990] 31)。

変化した歴史学が扱う人物と中身 (たとえば女性とジェンダー、感情と親密さ、貧困な人々と日常生活、狂人と異端者) は、どう歴史を記述すべきかという厄介な問題を提起した。

この難局によって大きく影響を受けたものの1つが、歴史家と古文書との関係である。過去30年以上に渡り、歴史的な古文書は重大な変化にさらされてきた。索引化され目録化されて利用可能になり、史料館に収録された (その結果、正当な史料とみなされた) ものは大きく変化した。古文書の再検討も同時に、実際にはそれに先んじて行われた。イタリアの「小さな歴史学」は、権力行使の歴史を書くためではなく分析対象となる人々の考え方や経験を再構築するために、制度化された記録、たとえば教会や国家、地方権力の記録を再三再四、手際よく使用している。ローラ・サッチャー・ウーリッチは、フェミニズムの立場から史料を読み、女性の視点から18世紀アメリカの小さな共同体の歴史を書きなおした (Ulrich, [1991])。

### 3

1960年代以前に主流であった歴史学のモデルは、新しいテーマを扱うには (内容と手法の両面で) まったく不十分であった。端的に整理してみると、この問題に対して3つの主要な対応がみられる。第1は、研究の中心原理としてエドワード・トムスンが論じた「経験」というカテゴリーを (ちなみに彼はこのカテゴリーを主観的にも客観的にも用いている) 採用するやり方である。これはフランスやイタリアよりもイギリスとドイツ (アメリカにおける潮流の1つでもある) で一般化した。第2はアメリカで支配的な動向 (プリンストン再編とも呼ばれる) であり、それは文化人類学を援用し、クリフォード・ギアーツが「濃厚な記述」という論法で全面的に展開した解釈戦略である (Ortner, [1999])。そして第3が、おもにイタリアにおいて、しかしフランスやドイツでも採用されたマイクロヒストリー的な分析に向かう潮流である。これらの戦術や潮流はいずれも孤立したり自律したものではなく、程度の差こそあれ、すべてを包摂しようとする語りに対する敵意や、(しばしばさらに攻撃的に) それがトムスンの天敵アルチュセールのごとき構造主義者だろうとデリダ (Derrida) のようなポスト構造主義者だろうと、すべての反人文主義的な立場に対する反感を共有していた。

日常生活とマイクロヒストリーの経験を論じた研究者に最もあてはまるのだが、以上述べた3つのアプローチが共有するものもまた人文主義的リアリズムであった。なぜなら、とくにイタ

リアにおいて、この種の研究のほとんどが懐疑論ではなく、現実を描こうという決意によって突き動かされていたからである。これはエドワード・トムスンが、見事なレトリックと弁解を許さないイギリス経験主義歴史学に愛着を示したことから明らかである。イタリアでは別のこだわりがみられた。ジョヴァンニ・レヴィは「人間行動をもっとリアルに描くための探究」を語り、「歴史家にとっての真の課題は現実の複雑さをうまく表現することである」と述べている (Levi, [1991] 110)。ギンズブルグはマリア・ルーシア・パラレス＝バーク (Maria Lucia Pallares-Burke) との対談を、現実を直視するという難しい課題に着手するように、という熱烈な主張で締めくくっている (Pallares-Burke, [2002] 210)。この主張は、「歴史研究は、展開するすべての局面が『構築』されはしても『提供』されることはないのだという明確な認識、研究対象とその重要性の確認、分析が行われるカテゴリーの詳述、論証の基準、結論を読者に伝える文体と語りの形式、これらすべてにより支えられている」。これは一見すると、歴史研究に対して反実証主義的、構成主義的な視点をもっていた彼本来の主張に反しているようにみえる (Ginzburg, [1993] 32)。しかし、イタリアの歴史家にとって現実主義と実証主義または経験主義は同じではないのである。なぜなら彼らは、第2次大戦直後のイタリアにおけるネオ・リアリストの運動から、さらに一般化すれば、文学と映画に由来する20世紀リアリズムの概念から自分たちの見解をまっさきに引き出したからである。

ネオ・リアリズムはイタリア以外ではロッセリーニ (Rossellini) \*<sup>9</sup> やヴィットリオ・デ・シーカ (De Sica) \*<sup>10</sup>、ルキノ・ヴィスコンティ (Visconti) \*<sup>11</sup> の映画、たとえば『戦火のかなたに』、『ローマで夜だった』、『無防備都市』、『自転車泥棒』、『揺れる大地』を通じてよく知られている (実際に私は、ロッセリーニの『戦火のかなたに』がイタリアのマイクロヒストリーの最初の作品ではないか、と強く主張したい)。しかしこれらの映画は、イデオロギーや芸術面での現実および日常生活の混乱に終止符を打つのに余念がなかった、戦後のより大きな文化運動の一部であった。小説家にしてギンズブルグの友人、イタロ・カルヴィーノ\*<sup>12</sup> (Italo Calvino) は、その事情について次のように述べている。「我々にとっては、もっぱら現実の世界をいかにして文学作品に変えていくかという詩論が問題であった」 (Forgacs, Lutton & Nowell-smith, [2000])。また、批評家チェーザレ・ザヴァッティニ (Cesare Zavattini) がいうように「我々が本当にやろうとしたのは、現実のようにみえるストーリーを創り出すのではなく、まるでストーリーのように現実を提示することであった」 (Stam, [1999] 73)。

---

\* 9 イタリアの映画監督。イタリアン・ネオ・リアリズムの代表的存在。彼の『無防備都市』『戦火のかなたに』『ドイツ零年』は戦争3部作として名高く、ネオ・リアリズムの旗手として世界的に反響を呼んだ。

\* 10 イタリアの俳優、映画監督。1942年の『子供たちは見ている』がネオ・リアリズムの先駆的作品として話題となる。続いて『自転車泥棒』などを発表し、イタリア映画界を牽引した。

\* 11 イタリアの映画監督、舞台演出家。1942年に『郵便配達は2度ベルを鳴らす』で長編監督としてデビュー。第2次大戦中に逮捕されるが連合軍により解放され、その後は舞台演出家としても名声を勝ち得た。

\* 12 イタリアの作家。空想的な作風で知られ、SFから歴史ものまで幅広いジャンルをこなした。代表作は『イタリア民話集』、『我らの祖先』、『コスモコミケ』など。

では、ネオ・リアリストたちが描いた世界とはどのようなものだったのか。彼らが描いたのは断片的で、ときに空想的で恣意的であり、争いに満ちた世界であり、不完全な知識と違う位相の意識で歪められ、循環的で反復的、主観的、しかも直線的でかつ一貫性の無い、異なった時間認識により特徴づけられた世界であった。それはあらゆる種類の人々が住み、あらゆる種類の声で語られる世界であった。一例として『戦火のかなたに』をみてみよう。ロッセリーニのこの映画は1つの「大きな物語」をもっている。それは1943-44年の英米軍による漸次的なイタリア解放であり、シチリア島からポー河流域にいたるイタリア各地で撮影された6つの物語で構成されている。その物語では、戦闘が人々の視線まで引き下げられている。そうすることを通じて、いかに時間の経過がずれるのかを示しながら、解放という肯定的なストーリーを掘り崩してその書き直しを要求する。人々は必要がないのに死に、相互理解に失敗する。親切心からの行動は死を招く。愛は無関心に変わる。登場人物たち(その多くは役者ではなく「素人」)は標準語同様に片言の言葉や方言、たとえばアメリカ英語やイギリス英語、ドイツ語、イタリアのシチリア方言、ナポリ方言、ローマ方言、トスカナ方言、ベネチア方言でしゃべる。観客は映画技術、つまりカメラの存在を意識させられるだけでなく、超然としたロッセリーニの奇妙な感性にも気づかされる。彼は映画のなかで、終始、真実と真実らしさ、日常生活の様式と大きな歴史の力との緊張感を描き出そうとするのである。

平凡な日常の観点から歴史を描き出すという、ロッセリーニのネオ・リアリストとしての芸術的な眼差しは、エーリヒ・アウエルバッハ(Erich Auerbach)がその代表作のなかで「模倣」として描き出した過程の一部である。それは(映画も含めた)西洋文学が、日常とその平凡さを鮮明に描き出す表象の形式を発展させていった過程の一部であった(Auerbach, [1968])。というのも、アウエルバッハが示したように、リアリズムと日常の結合は歴史記述よりも長編小説において、より高度に発展したからである。19世紀においてこの結びつきを最もうまく(つまりは最も説得的に、最も現実味のあるように)示していたのは(たとえばディケンズやバルザック、フロベール、トルストイの)小説文学であった。ギンズブルグの言葉を借りれば、小説は「歴史家が、歴史的事件を取り扱うにあたって痛々しいほど不適切であるという事実を暴露した」のである(Ginzburg, [1993] 24)。たとえ語り形式が異なっていたとしても、ウルフやプルースト、ジョイスの近代主義的な小説にも、この点はあてはまった。それゆえに、ルフェーブルが近代世界における日常生活を説明しようとしたとき、彼はまず最初にジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』に、その舞台となるダブリンと主人公のブルーム<sup>\*13</sup>、彼の妻モーリーに、平凡であると同時に魅惑的な社会領域に目を向けるのである(Lefebvre, [1984])。ギンズブルグが向上心ある歴史家たちへのアドバイスを求められたとき、彼はその歴史家たちに、小説を読むことで歴史に対する感性を磨くべきだと語ったのであった(Pallares-Burke, [2002] 203)。

想像力に富んだ小説は真実へ近づく手段を提供する。ギンズブルグはそれについて次のよう

---

\* 13 ダブリンを舞台とする『ユリシーズ』の主人公。新聞広告掲載の依頼を取ってくる仕事をしている。ユダヤ系の38歳。

に述べている。「作家は、現実のいくつかの局面を我々に気づかせてくれる。これは小説の認識的な側面であり、それを私はカルヴィーノを通じて知ったのである」(Pallares-Burke, [2002] 192)。しかし、これは小説と歴史学が区別できない、ということではない。むしろ、その歴史学が作られる過程は、リアリズムを高めるために明確にされる必要がある。レヴィは「語りの本体に、研究自体の手続き、文書史料の限界性、説得の技術、解釈の構成を組み込む」ことを主張する。それにより「研究者の視点が説明の本質的な部分となり」、その一方で「読者は一種の対話に巻き込まれ、歴史に基づく議論を構築する全過程に参加することになる」(Levi, [1991] 106)。ギンズブルグにとってそのような戦略は、『チーズとうじ虫』におけるメノッキオの信念をリアルに説明するうえで必要不可欠であった。「研究を妨げる障害となるのは文書史料の構成要素であり、したがってそれが説明の一部になる必要があった。しかし、迫害者の尋問または私の問いに直面したとき、主人公の躊躇や沈黙にとっても同じことがいえる。こうして仮説や疑念、不確定なものが語りの一部となり、真実の探究は獲得された(必然的に不完全な)真実の公表の一部となるのである」(Ginzburg, [1993] 23-4)。ナタリー・デーヴィスは、彼女の『帰ってきたマルタン・ゲール』を熱心に弁護する際に、ギンズブルグと非常に似た立場を採用した。すなわち、文書の読み方、自己の戦略と前提条件について詳細に述べた後に、最終的な解釈は憶測に委ねたのである(Davis, [1998] 572-603)。

この立場は文学作品を招請し、同時に拒絶する。招請するのは、それが語りの戦略の問題と直接関わるからである。拒絶するのは、ギンズブルグが指摘するように、不完全で推測的な分析を伴う歴史学のリアリズムは、もし望むならば実直な歴史学研究では得られない一貫性と結論を提供しうる小説のリアリズムとは異なるからである。文学作品に対して別の態度を取るとすれば、歴史叙述においてよくあることだが、良くても誤解を招き、悪ければ虚偽となる。

こうした解釈の戦略が成功しているのか、あるいはそれが日常生活を研究する歴史家の実践を正確に説明しているのかどうかという問いについて、私は判断を下すつもりはない。しかしここで強調したいのは、それが眺望型と閉じこもり型、両方の歴史学の隠喩が体現する親密さと距離感という難問に対する1つの答えだという点である。マイクロヒストリーとその他の日常生活に関する他の説明は、しばしば2つのかなり矛盾する主張を行いがちである。その一方が違和感(したがって距離感と差異)に関する主張であり、もう一方は親近感(したがって親密さと類似)に関する主張である。『チーズとうじ虫』の英語版序文で、ギンズブルグはまず「時折、そのものずばりの史料によって我々は(メノッキオを)非常に身近に感じることができる。つまり彼は我々自身と同じ人間であり、我々の1人である」と語る。しかし、すぐ次の段落では「だが、彼は我々とはまったく違った人間である」と書いている(Ginzburg, [1980] xi-xii)。「典型的な例外」という撞着語法は、このうわべの矛盾をうまく避けようとする(まったく説得力に欠ける)試みである。

違和感が強調される場合には、複雑で特殊な戦略が用いられる。それは、一方で自分の発見したものが、既存の歴史学の文脈では違和感があると主張し、他方では真実の効果を補うために「違和感はあるが真実である」という長い伝統に依拠する戦略である。方言や古くさい語法

を用いた対話形式で、広範な引用あるいは典拠となる文書を再生し、あたかもテーマが自身に自らを語らせることが、そうした解釈の特徴である。全体のねらいは、エキゾチズムや違和感を強める一方で、その説明を「真実」らしく思わせる点にある (Gallagher & Greenblatt, [2001] 54-6)。この点はたとえば、『猫の大虐殺』でロバート・ダーントンが用いた手法に対してドミニク・ラカプラ (Dominique LaCapra) が行った批判の核心である。「過去と現在での近接と差異の相互作用というまったく複雑な問題は、今ここで取り戻され広められている相違というかなり単純な考えに還元されてしまう」 (LaCapra, [1998] 105)。つまり、ラカプラの痛烈な批判の立場は、「風変わりな過去を——たとえ覗き見ではないにしても——素朴な傍観者としてみるもの」である (LaCapra, [1998] 106)。

相互に関係するこれら2つの批判は、しばしば、私が「ありのまま」(transparency)と「同一化」(identification)と呼ぶ類の歴史学にあてはまる。ジョーン・スコット (Joan Scott) の「経験」に関する有名な論文のように、ポスト構造主義的な考え方に由来していようと (Scott, [1991] 773-97)、あるいは史料解釈に関する伝統的な歴史学の考え方に由来していようと、前者の批判は一次史料を文字通りに (そして非歴史的に) 解釈することを重視する。後者の批判は、過去の行為者との相違を無視した共感と同一化の結果として、こうした誤った解釈が生じたと考えている。この点は、『帰ってきたマルタン・ゲール』のなかでの農婦ベルトランド・ド・ロールに対するナタリー・デーヴィスの解釈への、ロバート・フィンレイ (Robert Finlay) の批判の主眼であり、15世紀の秘密婚に関する論争の研究で、ジーン・ブラッカーが行ったローザンヌ<sup>\*14</sup>の描写に対して寄せられた多数の批評の要点でもあった (Finlay, [1988] 553-71; Kuehn, [1989] 517)。両方の場合とも歴史家は、独立し機知に富む行為者として女性を評価する現代のフェミニズム的な共感をもつことで、間違っただけ時代錯誤的な解釈を引き出した。

おわりに

親密さと距離感の問題は、現代の日常生活をめぐる研究でも繰り返されている。したがって、「本物の」日常生活に対して用いられる言語は、むしろ原始的社会に対して用いられる言語と類似している。つまり、社会の回復、社会に対する脅威、そして結果的に社会を保全する方法に関する言葉が用いられるのだ。日常生活は風変わりであり、既存の学問的方法ではほとんど回復しがたいという考え方、学問的観点から日常生活は「奇妙な」あるいは「他者」であるという見解は、日常を通じて真実に迫ることができるという認識と、我々が想像する以上に、適合的である。その真実とは、部分的でもイデオロギー的でもなく、学問分野の足手まといになるわけでも錯覚をおこさせるわけでもなく、何らかの意味で「リアルなもの」なのである。そ

---

\* 14 ブラッカーの研究 [1986] の分析対象人物。他の女性と結婚していたことを理由に、法廷で夫を告訴した女性。



して日常生活の尺度を採用することで、学生は、素材との具体的で緊密な関係を保つことが可能になる。しかし、大掛かりな抽象化の領域では、その親密な関係を達成するのは困難である。日常の「声」が存在することで、そうした感情は高まる。それは日常生活の研究を通じて、あたかも研究者が対象とした人々や環境との違いよりも全体的な調和を経験するようなものだ。そして人間らしい活動を取り戻す可能性も同じく重要である。すなわち、自由はまったくの幻想ではない。ジョイスのブルームの場合のように、平凡な人生にも英雄談がある、という感覚が重要なのである。ここで問題なのは、こうした感覚が真か偽りか（意識的かどうか）ということではなく、それらが日常生活の研究の過程で達成できるような、歴史的に条件づけられた要求であるということである。

しかし、仮に我々が日常生活の研究という課題に満足し、先達のいく人かが同様には感じなかった（もしくは同じ立場にはいなかった）欲求を充足することができたとしても、我々が研究対象となる現象をめぐる何らかの展望を模索する義務から免れるわけではない。展望についてギンズブルグは以下のように記している。「主観性の要素を強調するから、展望をもつことは善であると通常いわれる。しかしそれは同時に悪でもある。なぜなら展望は心情的な親密さ（または同一化）よりもむしろ、知的な距離感を強調するからである」（Ginzburg, [2001] 156）。我々が必要とするのは距離感と親密さの両方であり、多く的人是理解してくれると思うが、最良の歴史学とはこの緊張をうまく切り抜けることに成功した歴史学のことである。なぜなら結局は、研究の題材として平凡なもの、通常のもの、そして日常生活の白色騒音を取りあげる歴史叙述の有効性は、それを支える人文主義的リアリズムの前提にではなく、叙述の手法の質によって決まるからである。この点から考えて、そのようなアプローチによって過去30年間に公開された最良の歴史研究のいくつかが生み出されたことは間違いない。

#### 【参考文献】

- Appleton, Jay [1996], *The Experience of Landscape*, revised edition, Chichester.
- Attir, Mustafa O., Holzner, Burkart & Suda, Zdenek [1981], *Directions of change: Modernization Theory, Research and Realities*, Boulder, Colorado.
- Auerbach, Erich [1968], *Mimesis: the Representation of Reality in Western Literature*, Princeton [篠田一士・川村二郎訳『ミメシス——ヨーロッパ文学における現実描写』(上・下)(ちくま学芸文庫、1994)].
- Bell, David [2002], "Total History and Microhistory: The French and Italian Paradigms", in Lloyd Kramer & Sarah Maza (eds.), *A Companion to Western Historical Thought*, Oxford, pp. 262-276.
- Bennett, Tony & Watson, Diane [2002], *Understanding Everyday Life*, Oxford.
- Brown, Judith C. [1986], *Immodest Acts: The Life of a Lesbian Nun in Renaissance Italy*, Oxford [永井三明他訳『ルネサンス修道女物語——聖と性のミクロストリア』(ミネルヴァ書房、1988)].
- Bruckner, Gene [1986], *Giovanni and Lusanna: Love and Marriage in Renaissance Florence*, Berkeley [在里寛司訳『ルネサンス期フィレンツェの愛と結婚』(同文館出版、1988)].
- Cannadine, David [1984], "The Present and the Past in the English Industrial Revolution 1880-1980", *Past and Present* 103, pp. 131-72.

- Carlyle, Thomas [1899], *Critical and Miscellaneous Essays*, London.
- Chartier, Roger [1981], “Intellectual History or Sociocultural History” in Dominick LaCapra & Steven L. Kaplan (eds.), *Modern European Intellectual History: Reappraisals and New Perspectives*, Ithaca.
- Chartier, Roger [1997], “Michel de Certeau: History, or Knowledge of the Other”, in Chartier (ed.), *On the Edge of the Cliff: History, Language, and Practices*, trans. Lyudia G. Cochrane, Baltimore.
- Cohen, Lizbeth [2001], “Citizens and Consumers in the United States in the Century of Mass Consumption”, in Martin Daunton & Matthew Hilton (eds.), *The Politics of Consumption. Material Culture and Citizenship in Europe and America*, Oxford & New York.
- Davis, Natalie Zemon [1975], *Society and Culture in early modern France*, Stanford [成瀬駒男他訳『愚者の王国異端の都市——近代初期フランスの民衆文化』(平凡社、1987)].
- Davis, Natalie Zemon [1983], *The Return of Martin Guerre*, Cambridge [成瀬駒男訳『帰ってきたマルタン・ゲール——16世紀フランスのにせ亭主騒動』(平凡社、1993)].
- Davis, Natalie Zemon [1987], *Fiction in the Archives: pardon tales and their tellers in sixteenth-century France*, Stanford [成瀬駒男・宮下志朗訳『古文書の中のフィクション——16世紀フランスの恩赦嘆願の物語』(平凡社、1990)].
- Davis, Natalie Zemon [1988], “On the Lame”, *American Historical Review* 93 (3), pp. 572-603.
- De Certeau, Michel [1984], *The Practice of Everyday Life*, trans. Steven Randall, Berkeley [山田登世子訳『日常実践のポイエティック』(国文社、1987)].
- De Certeau, Michel [1986], *Heterologies: Discourse on the Other*, trans. B. Massumi, Minneapolis.
- De Certeau, Michel [1988], *The Writing of History*, trans. Tom Conley, New York [佐藤和生訳『歴史のエクリチュール』(法政大学出版局、1996)].
- Demos, John [1994], *The Unredeemed Captive. A Family Story from early America*, New York.
- Finlay, Robert [1988], “The Refashioning of Martin Guerre”, *American Historical Review* 93 (3), pp. 553-71.
- Forgacs, David, Lutton, Sarah & Nowell-Smith, Geoffrey [2000], *Roberto Rossellini. Magician of the Real*, London.
- Gallagher, Catherine & Greenblatt, Stephen [2001], *Practicing New Historicism*, Chicago and London.
- Gardiner, Michael E. [2000], *Critiques of Everyday Life*, London.
- Ginzburg, Carlo [1980], *The Cheese and the Worms: the Cosmos of a Sixteenth-Century Miller*, trans. John and Anne Tedeschi, Baltimore [杉山光信訳『チーズとうじ虫——16世紀の粉挽屋の世界像』(みすず書房、2003)].
- Ginzburg, Carlo [1989], *Clues, Myths and Historical Method*, trans. John & Anne Tedeschi, Baltimore.
- Ginzburg, Carlo [1993], “Microhistory: Two or Three Things I know about It”, *Critical Inquiry* 20, pp. 10-34.
- Ginzburg, Carlo [2001], *Wooden Eyes. Nine Reflections on Distance*, trans. Martin Ryle and Kate Soper, New York [竹山博英訳『ピノッキオの眼——距離についての9つの省察』(せりか書房、2001)].
- Ginzburg, Carlo & Poni, Carlo [1991], “The Name and the Game: Unequal Exchange and the Historiographic Marketplace” in Muir, Edward & Ruggiero, Guido (eds.), *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, Baltimore.
- Gregory, Brad S. [1999], “Is Small Beautiful? Microhistory and the History of Everyday Life”, *History and Theory* 38 (1), pp. 100-111.
- Harootyan, Harry [2000], *History's Disquiet. Modernity, Cultural Practice and the Question of everyday life*, New York.
- Highmore, Ben [2002], *Everyday Life and Cultural Theory. An Introduction*, New York and London.
- Kagan, Richard [1990], *Lucrecia's Dreams: Politics and Prophecy in Sixteenth-Century Spain*, Berkeley [立石博高訳『夢と異端審問——16世紀スペインの一女性』(松籟社、1994)].
- Kuehn, Thomas [1989], “Reading Microhistory: the example of Giovanni and Lusanna”, *Journal of Modern History* 61 (3), pp.512-534.
- LaCapra, Dominick [1988], “Chartier, Darnton, and the Great Symbol Massacre”, *Journal of Modern History* 60 (1), pp.

- 95-112.
- Laslett, Peter [1965], *The World we have Lost*, London [川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界——近代イギリス社会史』(三嶺書房、1986)].
- Lefebvre, Henri [1984], *Everyday Life in the Modern World*, trans. S. Rabinovitch, New Brunswick [森本和夫訳『現代世界における日常生活』(現代思潮社、1970)].
- Lefebvre, Henri [1991], *Critique of Everyday Life: Volume I, Introduction*, trans. J. Moore, London.
- Levi, Giovanni [1981], “Un problema di scala”, in *Dieci interventi di Storia Sociale*, Turin, pp. 75-81.
- Levi, Giovanni [1988], *Inheriting Power: the Story of an Exorcist*, trans. Lydia G. Cochrane, Chicago.
- Levi, Giovanni [1991], “On Microhistory”, in Peter Burke (ed.), *New Perspectives on Historical Writing*, Cambridge, pp. 93-113 [「ミクロストーリー」谷川稔他訳『ニュー・ヒストリーの現在——歴史叙述の新しい展望』(人文書院、1996)].
- Lipset, Seymour Martin [1963], *Political Man*, London [内山秀夫訳『政治のなかの人間——ポリティカル・マン』(東京創元新社、1963)].
- Ludtke, Alf (1995), *The History of Everyday Life. Reconstructing historical experiences and ways of life*, Princeton.
- Medick, Hans [1995], “Missionaries in the Rowboat? Ethnological Ways of knowing as a challenge to social history”, in Alf Ludtke (ed.), *The History of Everyday Life. Reconstructing historical experiences and ways of life*, Princeton, pp. 41-71.
- Miller, Daniel [1997] “Coca-cola: a black sweet drink from Trinidad” in D. Miller (ed.), *Material Cultures: why some things matter*, London.
- Muir, Edward & Ruggiero, Guido [1991], *Microhistory and the Lost Peoples of Europe*, Baltimore.
- Ortner, Sherry B. [1999], *The Fate of “Culture”: Geertz and Beyond*, Berkeley.
- Pallares-Burke, Maria Lucia [2002], *The New History. Confessions and Conversations*, Cambridge.
- Ravel, Jacques [1995], “Microanalysis and the Construction of the Social”, in Lynn Hunt & Jacques Revel (eds.), *Histories: French Constructions of the Past*, trans. Arthur Goldhammer et al., New York, pp. 492-502.
- Rosental, Paul Andre [1996], “Construire le ‘macro’ par le ‘micro’: Fredrik Barth et la microstoria”, in Jacques Revel (ed.), *Jeux D’Echelles. La Micro-Analyse a l’Experience*, Paris.
- Sabean, David Warren [1984], *Power in the Blood: Popular Culture and Village Discourse in Early Modern Germany*, Cambridge.
- Scott, Joan W. [1991], “The evidence of experience”, *Critical Inquiry* 17 (4), pp. 773-97.
- Smith, D. E. [1990], *The Conceptual Practices of Power: A Feminist Sociology of Knowledge*, Toronto.
- Stam, Robert [1999], *Film Theory: an Introduction*, Oxford.
- Thompson, Edward [1963], *The Making of the English Working Class*, London [市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』(青弓社、2003)].
- Tilly, Charles [1984], *Big Structures, large processes, huge comparisons*, New York.
- Ulrich, Laurel Thatcher [1991], *A Midwife’s tale: the life of Martha Ballard, based on her diary 1785-1815*, New York.

## 【訳者付記】

本論文の著者であるジョン・ブルーア（John Brewer）教授は、1947年生まれ、ケンブリッジ大学シドニ・サセックス・カレッジで博士号取得後、1976年にイェール大学に招かれ、以後、ハーヴァード大学、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校、シカゴ大学とアメリカの主要大学の研究職を歴任し、現在はカリフォルニア工科大学で教鞭をとる。「長い18世紀」イギリス史研究を代表する歴史家の1人であり、これまでも民衆政治、消費文化、国家論など多岐にわたる分野で活躍されてきた。主著としては、*Party Ideology and Popular Politics at the Accession of George III*, 1976、*The Birth of a Consumer Society: The Commercialization of Eighteenth-Century England*, 1982（Neil McKendrick、J. H. Plumbとの共編著）、*The Sinews of Power: War, money and the English State, 1688-1783*, 1989〔大久保桂子訳『財政＝軍事国家の衝撃——戦争、カネ、イギリス国家 1688-1783』（名古屋大学出版会、2003）〕、*The Pleasures of the Imagination*, 1997、近著としては、*A Sentimental Murder: Love and Madness in the Eighteenth Century*, 2004があげられる。

今回の来日は、大野誠、近藤和彦、坂下史の三氏を中心に活動されている愛知県立大学と東京大学の科研研究グループの招聘によって実現したものであり、ブルーア教授は名古屋、東京、大阪の3ヶ所で講演をされた。とくに大阪では、サントリー文化財団後援の「グローバル・ヒストリー・セミナー」の一環として、2004年6月8日と9日に2つのセミナーを開催した。本論文は、そのうち9日に大阪大学大学院文学研究科で行われた生活社会史をめぐるヨーロッパの史学史についての報告、‘Historians and the Study of Everyday Life’の全訳である。

訳出にあたっては読者の便をはかるために、英文原稿にはなかった章番号と訳注を適時挿入した。また人名については、できるかぎり原語発音での表記に努めたが、すでに定訳となっているものについては慣例にしたかった。翻訳にあたり、大阪大学の秋田茂教授に多くの助言をいただいた。しかし最終的な訳責は、常に訳者自身が負うものである。